



内子座 藝於遊



床板の解体②

令和7年12月末で予定していた範囲の床板解体が完了しました。これも他の作業にたがわず地道な作業で、みなさん、本当にお疲れ様です。

今回のかわら版では、床板を解体したことで見えてきたことをお知らせします。

内子座では、あまりその場所を使ってはいませんが、舞台上手側にある義太夫床の2階には畳が敷いてありました。その畳を取外し、床板を解体したところ、その下からさらに床板が現れました。右上の写真がその床板です。当初の床板と思われます。昭和の復原改修工事を経て、平成に入り、活用のための整備工事を行っていますが、その際に、この場所を使いやすいように整備したものでしょう。また、畳を敷いた時に壁にあたる部が漆喰で仕上げられた状態で残っていたので、畳は当初は敷かれてなかったのではないかと推測できます。



▲上の2つの写真は、東西の檣の1階床板を解体した時の写真です。左は東檣、右は西檣です。今回の保存修理工事前は、それぞれ下足場と事務室として使用していました。東檣は、商工会館として使用されていた当時、事務所の受付出入口として使われていて、改造された際に土間コンクリートが増し打ちされていたようで、それがそのまま残っていました。一方西檣の方は、床下は東石のある土間空間があり、根太や大引きは昭和の復原改修時の材ながら、床束は一部に旧根太を転用して使われているのが見られました。

▲舞台上手の床板を解体した時の写真です。土台に根太の仕口が残っていて、当初の建築から根太割が変更されていることがわかりました。現状は一間三ツ割半なのに対し、創建当初は一間四ツ割(↓)、半間位置に幅広の根太、柱位置は仕口なし・釘止めという仕様になっていました。昭和の復原改修の際、床面の強度を増すためにこのように変更されたと考えられます。なお、西檣1階も現状二間七ツ割に対し、当初は一間四ツ割の根太割でした。